

《解説》

石井啓一郎

ここに掲載したのは、現代トルコを代表する大作家であるヤシャル・ケマルの小説から編集した抄訳版である。作者ヤシャル・ケマルに関しては、二〇一二年六月三〇日に早稲田大学を会場に、本研究会が開催した公開講座において筆者が行った簡単な報告が、『イスラーム世界研究』（第6巻、二〇一三年）に論考として改稿掲載してあるので、ここで重複は避けるが、トルコの東地中海地方のチュクローワ平原の農村にトルコ共和国成立と時を同じくして生まれ、国語改革後のトルコ語による小説のひとつのスタイルを創り出した巨匠でもある。多作家のヤシャル・ケマルは、様々の小説やルポルターージュなど多岐にわたる作品を発表してきているので、彼を一面的なイメージで語ることは過ちをも生むかもしれないが、彼の名声は『瘦せたメメッド』など、生まれ故郷であるチュクローワ平原の農村を舞台にした多くの小説に負うところが大きいと申して差し支えないであろう。

ここに抄訳を作成した小説『蛇を殺すなら』は、トルコのひとつの社会問題でもあ

る「名誉殺人」事件が、チュクローワ平原のアナワルザの村の閉鎖空間のなかで、半ば予定調和的に発生し、息子が実の母を殺害することになるという物語である。

名誉殺人というのは、エジプト等のアラブ諸国にもしばしば起きる問題で、特に女性が行った逸脱行為を起した場合などに、その行為が家族の名誉を汚すものとして、親兄弟や親戚がその逸脱行為に対する私的手段による処罰（端的にいえば殺人）をいう。

発端は、母エスメを追いかけ続けた同郷の男アッバスが、人妻となってもなお諦めきれずに母につきまとい行為を続け、挙句に父ハリルを殺害してしまう。直接の犯人アッバスは、事件直後に村人たちによって私刑で惨殺されるのだが、被害者ハリルの親族は、婚前より情交のあったアッバスがハリルを殺害したのは、エスメの逸脱行為が原因であり、ハリルの殺人犯はエスメだとして、復讐を求めようになる。

そして「世にも稀な美女」「チュクローワいちばんの、あるいは世界でいちばんの美女」であるエスメに対する、村人の憧れと憎悪の入り混じった感情が造りだす「殺意」。倫理的な大義である「復讐」を振りかざして

の、村人の集团的殺意や、実の息子ハリルを殺された、ハサンの祖母の憎悪と報復感情。そのなかに、若く美しい義姉の扱いに悩むハリルの弟たち（ハサンの叔父たち）。適法な処刑としての「復讐」の要請と、母を殺すことへの逡巡に苦しむハサン。

そこに自分の非業の死の贖いがなければ、最後の審判の日まで死霊として彷徨う運命だと嘆き、村人たち、弟、そしてついにハサンの前に姿を表して、復讐を促すハリルの幽霊（原語は**haya**）。その怪異現象がさらに、「復讐」を成就することの倫理的意味を裏付けてゆき、なおさらに閉鎖空間の処罰感情が過熱し、エスメの殺害がそこに予定調和的なものとなってゆく。

一方で、もともと求愛にも取り合わずにいたハリルに、騙し討ち同然で結婚を余儀なくされ、息子ハサンへの愛情だけしか拠り所がないエスメ。彼女は絶対にハサンから離されることは受け入れず、殺されると分かっていても、ハサンの傍で死ぬなら上等と譲らない。

義務と人情の板挟みとでもいった、比較的わかり易い構図のなかに展開する物語ではあるが、今挙げたような、登場人物たちそれぞれの思惑や感情、鬱屈といったもの

が絡み合うなかでの心理の綾の描き方の巧さの際立った作品ということができると、筆者は思料する。

またイスラーム世界で（無論、民俗・土俗という次元には確実に怪異現象が認知されるとしても）教義神学への配慮からか、直截に認知することはどこか憚られる「幽霊」というテーマを、文学に掬い取っても、荒唐無稽なつくりごとに終わらせず、むしろエスメヤハサンをも含めた登場人物たちの集団的な狂気へと突き進ませてゆく怪奇幻想的な筆致も秀逸といえよう。こういう部分で、一種のケレン味のようなあざとさを見せるあたりも、ヤシタル・ケマルという作家を知らううえで注目して良い点であろう。

本篇は一義的には「名誉殺人事件」をめぐる物語であるが、一方本篇は、ハサンと獄中で知り合った「私」という語り部の言葉で進められていると考えられる。その「私」は、作品の登場人物としては、わずかに二度しか登場しないし、存在感も強くはない。しかし、そのような「私」に、左翼運動に関わったと謂う政治的理由によって自ら投獄経験を味わったヤシタル・ケマル自身を投影する、何らかの含意があるやもしれない。また本篇には、作者が多元文化共存を

肯定するとの信条に基づき、言語自治や文化的独自性の認知といった、(クルド人に代表される)マイノリティの擁護に声をあげた事実を想起させるエピソードも含まれている。その意味で、本篇には、ヤシタル・ケマルの通底する諸々の主題が広汎に登場していると考えるべきである。

拙訳稿においては、限られた紙幅のなかで、自己完結し得る主題を核に抄訳をまとめることを意図したものである。即ち、ひとつの名誉殺人の顛末を、幽霊として化けてでる、死者の怨念という怪異譚的な建付けのなかに描いているところに、本篇の文学として獨創性が際立っているとの理解に基づき、本篇の訳出部分を選択・抜粋を試みたものであることを申し添えたい。

ヤシタル・ケマルの外国語への翻訳が難しい理由は、無論俗語や方言の語彙が多用されることの難解さも一因であるが、ヤシタル・ケマルの文体が有する土着的なリズム感やメリハリが醸し出す、不思議な歯切れの良さを身上とするところが、翻訳という形になるとうまく別言語の枠組みのなかに活きてこないということを挙げておくべきかもしれない。

本篇の抄訳にあたって、筆者は改めて

この難しさを実感しており、何とかヤシタル・ケマルの作品の完訳を日本につくってゆきたいと思いつつも、己の非才を改めて思い知らされる作業でもあった。このような場を書くべきことではないかもしれぬが、日本におけるトルコ現代文学の一層の受容に微力でも尽くせたらという思いとともに、ここに実験的に作成してみた拙い抄訳に読者各位のご寛容をお願いしたいと思いつつも、多くのご指導やご叱正を賜れるなら、幸甚至極と存じる次第である。